

玉川学園高等部・中学部

国際機関へキャリア選択できる 全人的リーダーの育成

【構想の概要】

長年、国際機関での日本人職員数が不足しているという社会問題へ対し、多くの国際機関が活動のフィールドとしている「貧困」「人権」「環境」「外交」「国際協力」という5分野を入口に、生徒が国際機関についての具体的なイメージを持った上で、個人テーマを掲げて研究発表することを通し、世界の諸問題へ関心を持ち、個人としての知識獲得、国際機関でも通用するコミュニケーションスキルの基礎を築いていく。

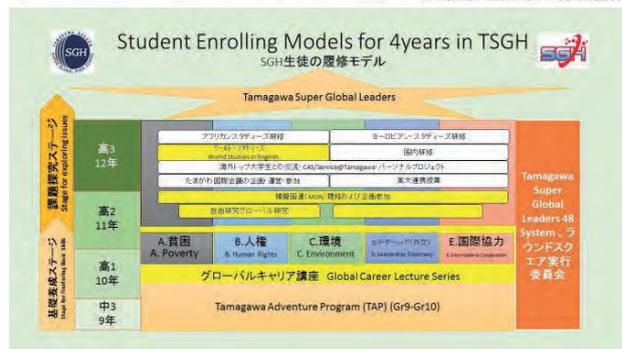


教育課程表 (ホリスティック・ラーニングコース)

教科・科目	標準 単位数	第一学年			第二学年			第三学年			高大連携
		共通	選択	自由 選択	共通	選択	自由 選択	共通	選択	自由 選択	
国語	4	1			1			1			
英語	4	4			3			3			2
世界史A	2		2								
世界史B	2		2		1			1			
日本史A	2		2								
日本史B	2		2		3			4			2
地理A	2							4			2
地理B	2							4			2
公民	2				2			4			2
経済・経済	2				2			4			2
グローバルスタディーズ	2							4			2
数学I	3	3						4			2
数学II	3				4			3			1
数学III	3							7			
数学A	2										4
数学B	2				1			2			1
IT・数学B	2										1
科学と人間生活	2							4			2
物理基礎	2										
物理	2				3			4			2
化学基礎	2										
化学	2				3			4			2
生物基礎	2				3			4			2
生物	2				3			4			2
SS科目	4							4			4
SS科目	4							4			4
体育	7-8	3			3			2			2
健康	2				1			2			2
選択体育・L.A.D.	2							4			2
音楽I	2	1			1			3			2
美術I	2							1			2
美術II	2							1			2
美術III	2							1			2
特別	2							1			2
C.G.D.	2							1			2

教科・科目	標準 単位数	第一学年			第二学年			第三学年			高大連携
		共通	選択	自由 選択	共通	選択	自由 選択	共通	選択	自由 選択	
英語I	3	3									
英語II	4				4			2			1
英語III	4							4			2
英語IV	4										2
英語表現I	2							2			2
英語表現II	4							4			2
英語会話	2							4			2
英語読書	2							4			2
家庭基礎	2	2									
社会と情報	2	1			1			4			2
情報の科学	2							4			2
総合的な学習の時間(自由研究)	3-5	2			2			2	1		1-2
土田大学推薦	2										1
特別活動(知作・土社R)	1				1			1			1
履修単位数合計		33	3	7	33	3	7	31	3	3	33

※は学校設定科目、※※は学校設定教科



教育課程表や時間割上の工夫

本学では SSH と IB を実施しているため、SGH としての新たなコース設定は困難であることから既存の科目や実践を生かして SGH の実践を行っている。中3～高3の各学年で SGH 関連授業と、異学年で複数年にわたり継続的に取り組める授業を設定。

■ SGH 関連授業

中3～高1：TAP 高2：英語会話

高3：ワールド・スタディーズ

■異学年で複数年にわたり継続的に取り組める授業

自由研究グローバル・スタディーズ、模擬国連

SGH 関連科目は、研究課題「国際機関へキャリア選択する全人的リーダーの育成」の達成へ向けて多角的な生徒への働きかけにつながっており、その効果は各生徒による意識調査に表れている。

教科間の連携

SGH 実行委員会に所属する教諭は英語科、地歴公民科、数学科、理科、国語科、音楽科で構成されている。また SGH 成果として出版を予定しているハンドブック作成プロジェクトに関しても、英語科、地歴公民科、数学科、国語科、美術科で実践されている。

○模擬国連

中3～高3が履修できる自由選択科目として設定。「外交」分野に関して実践を通して理解し、研究する。国語科、英語科、理科、IB クラス社会科の教諭、専門アドバイザーが指導し、学際的な指導体制がとられている。異学年での活動、複数年の履修も可能である。

○ワールド・スタディーズ

公民科と英語科 ELF 教員によるチーム・ティーチングのアクティブ・ラーニング形式で実施しており、英語でも実施。課題研究テーマの貧困、人権、環境、外交、国際協力を総合的に探究する科目であるが、生徒意識調査からも高い成果が認められた。

指導方法の工夫

教科を問わず、基本アクティブ・ラーニング方式を採用しており、その実施科目は増加する傾向にある。また教職員向けの教員研修の機会も設けた。2015年度には本校 SGH 運営指導委員長 David

Selby 博士による教員向けワークショップ、模擬国連では教員向け研修会を毎年行っている。



成果と検証

各取組後には必ずマークシート形式のアンケートを実施し、生徒による評価を実施してデータを蓄積している。また第三者評価として2014、2016、2018年度にはイギリスの教育団体「Sustainability Frontiers」による評価を受けている。評価レポートは、各年度末の報告書へ掲載。

高大連携

SGH 指定以降、国内外の大学9校（うち SGU3校、海外大学2校）と海外大学に在籍する大学生による学生団体1団体と連携した。

■大学教員による SGH 研究課題を深めるためのサマーコース開設1校：立教大学（SGU）※立教大学教授陣による貧困、人権、外交分野をテーマとした英語で行われる3日間の連続講義を実施（2014～2016年度）

■グローバルキャリア講座の講師招聘実績6校：関西学院大（SGU）、東京外国語大（SGU）、政策研究大学院大、玉川大、東京工業大、駒沢大

■SGH 海外研修における訪問実績大学2校：ボツワナ国立大学（ボツワナ）、ヤゲヴォ大学（ポーランド）

■学生団体2団体：

GAKKO PROJECT、AIESEC JAPAN

SSH と SGH の連携

SSH と SGH の連携を深める取り組みは、2017年度より SSH/SGH 合同実行委員会の開催、SSH&SGH 合同生徒発表会を開催した。また2018年度に SSH は第3期目の指定を受け、SGH 「グローバルキャリア講座」の成功を参考として新規に昼に「サイエンスキャリア講座」を開催していくことを決めた。

特色ある取り組み

①グローバルキャリア講座

内閣府、外務省、日本赤十字社、JICAをはじめ、IMF、ILO等の国際機関、国際NGOより講師を招き、SGH研究課題5分野に関する講座を開講。

SGHの各実践の関連を強める媒体的講座が「グローバルキャリア講座」であり、大きな成果につながっている。任意参加であるTED方式のグローバルキャリア講座への平均参加数も55名から90名に164%の増加。(参考：2015年度生徒総数897名)。その後も平均約120名の生徒が任意参加している。

SGH対象生徒群において、「将来留学したり、仕事で国際的に活躍したい」と考える生徒の割合が64.6%から80.5%へ、英語力はCEFRのB1、B2以上の生徒の割合が42.5%から47.8%へと向上しているデータが示された。SGH対象外生徒群においても、留学や海外研修へ行く生徒数が増加した。学年単位(年間2～4回)、TED方式(昼食時自由参加)、授業内実施(ワールド・スタディーズ、模擬国連)など多様な形態での実施が生徒の自主的参加を促す環境へとつながり、一定の効果を挙げたと考えられる。

IBクラスにおいても、SGHの諸活動へ参加を通して、パーソナル・プロジェクトやエクステンド・エッセイのテーマを設定し、課題研究を深めている生徒がみられる。

②自由選択科目「模擬国連」

中3～高3の自由選択科目。「外交」分野に関して毎年1つのテーマを定め、その問題を調査した上で、模擬国連の手法を使い、課題解決策を参加者全員で導き出す。グローバルな課題を各国の代表となって学ぶため高いコミュニケーション力と、会議は英語で行うため英語力が要求される。国語科、英語科、理科、IBクラス社会科の教諭、専門アドバイザーが指導し、学際的な指導体制がとられている。異学年での活動、複数年の履修も可能である。

③玉川学園スーパーグローバルリーダーズ(SGL)48認定制度

SGH関連イベント、語学検定、英語を使った各種コンテストへの応募や入賞、学内ホスト、高大連携企画参加などSGH関連活動へ参加した生徒へ難

易度に応じてポイントを付与している。各年度末にはポイント上位48位程度の生徒の表彰を実施。SGL48認定を目指してSGH関連活動へ参加する生徒も増加し、活動分野も多様化するようになってきており、生徒の動機付けには一定の効果がみられている。また大学入試等でも活用できるように一覧表をして出力することもでき、毎年10名程度の高3生が推薦入試の添付資料として活用している。

④ラウンド・スクエア(RS)実行委員会、たまたがわ国際会議の企画・運営・参加

RS担当教諭2名をSGH事務局が補佐する形で運営。生徒のリーダーシップを育むため、3日間の会議は生徒による自主企画の運営とした。2014年度も2015年度も、海外の大学生によって構成されるGAKKO PROJECTのメンバーを招へいし、リーダーシップに関するワークショップを英語で行った。2015年度は、ミレニアムプロミスジャパンとユニクロから講師を招き、勉強会を行い、2017年度は人権～LGBTをテーマに講師を招き学習会を行った。またユニクロの「服のカプロジェクト」には4年連続で参加しており、近隣の保育園にも協力を呼びかけ、例年50箱程度服を集めている。

⑤公民科選択科目「ワールド・スタディーズ」

SGH課題研究分野(貧困・人権・環境・外交・国際協力)等を総合的に学習し、理解を深める科目。英語科と連携し、ELF教員とのティーム・ティーチングで、アクティブ・ラーニング形式の授業を実施している。また、英語による授業も行っている。

生徒に対するアンケート結果より、知識獲得のみならず、自己の行動変容への動機づけも見られ、高い成果が認められた。

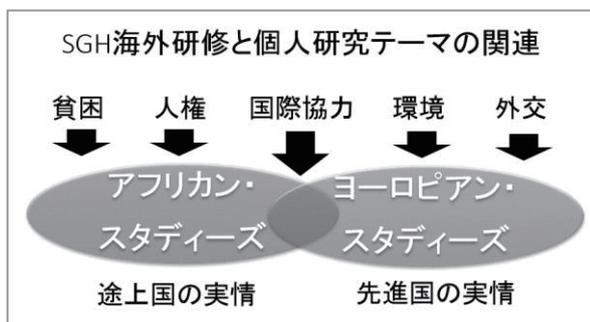
⑥2つの海外研修

アフリカン・スタディーズは、貧困、人権、国際協力分野の海外研修として位置づけ、ボツワナと南アフリカの高校や大学、スラムなどで実地研修した。

ヨーロッパ・スタディーズは、環境、外交、国際協力分野の海外研修として位置づけ、ドイツ、スイス、ポーランドで実地研修した。

海外研修実施後のアンケートでは、「国際機関の現場でのキャリアイメージ」「グローバルな課題に

対する具体的なイメージ」「国際機関・NGOでの仕事に興味を持っている」に関して、参加者全員が「強くそう思う」または「そう思う」と回答した。また英語力を伸ばしたいとの問いに対しては、参加者全員が「強くそう思う」と回答した。



効果と考察

「国際機関へキャリア選択する全人的リーダーの育成」を研究開発課題に掲げ、実践を重ねてきた。その結果、生徒、教員、保護者においてそれぞれ効果が認められた。

■生徒

- ①国際的なキャリアを志望する生徒、国際機関が取り組んでいるグローバルな諸課題を理解し、自分との接点を感じている生徒数の増加がみられた。
- ②自主的に留学又は海外研修へ行く生徒数が増加した。
- ③SGH対象生徒群において、英語力の向上がみられた。生徒全体においても英語への学習意欲の向上がみられた。またIBコースのディプロマ(DP)取得率が指定前よりも向上した。

SGHの活動へ参加した生徒の自主的に自己研鑽活動も行われた。例えば2015年9月に行われた「中高生のための国際機関キャリアフォーラム」後に、UNHCR主催の難民映画祭へ運営ボランティアとして参加した3名の生徒がいた。2014年度に海外研修「アフリカン・スタディーズ」に参加した生徒は、2015年に国立オリンピック記念青少年総合センターで「APYC高校生アフリカ委員会第1回会議」を主催。外務省のアフリカ担当者を招いて基調講演を実施した。自分たちで見聞きたアフリカの問題を高校生の視点から理解しようとする機会となった。また2016年の卒業生では大学在学中に国連ボランティア(UNV)へ選抜され、ジンバブエへ派遣された卒業生がいた。少しずつ成果の片鱗を垣間見る実践も報告されるようになってきた。

■教員

- ①SGH指定以降、自分の授業などで何らかの変化があったと回答した教員が半数以上いた。
- ②SGH指定以降、生徒のグローバルな課題に対する興味関心に変化が見られたと感じている教員が92%にのぼった。
- ③SGH指定以降、生徒の進路選択に変化がみられたと感じている教員が75%にのぼった。

■保護者

- ①保護者(父母総会出席者90名)の95%は、本学のSGHの教育的意義を理解している。
- ②保護者(同上)の90%は本学SGHの取り組みを認識している。

今後の課題

①本学オリジナルなSGH教材集(Teacher's Handbook)の開発

5年間のSGHの実践を通して様々なアクティビティを授業の内外で実践してきたが、現在、イギリスに本拠地を置くSustainability Frontiers監修の下、誰でも簡単に本学SGHの研究5分野(貧困・人権・環境・外交・国際協力)の教育実践が教室でできる事例集の開発を行っている。現在アクティビティのテストが各授業で進行しており、2019～2020年度中の出版を目指している。

②SGH終了後のレガシーの構築

SGH終了後、どの実践を残し、深めていくのか、現在考察が始まっている。現時点では、グローバルキャリア講座、SGL48ポイント制度、模擬国連、ラウンド・スクエア実行委員会等が有力候補であるが、校務分掌やどのように実施するかなど、形式や回数については今後議論を深めていく。

本学の研究テーマは、高校卒業や大学卒業後直ちに効果を測定できるような課題ではない。例えば国際公務員の多くは、大学院へ進学したり、企業でスキルを磨いたりして、転職をして、国連や国際NGOで活躍している方々ばかりである。しかし、現時点での「SGH研究の効果」を問うとするならば、高校卒業後に留学や海外研修へ参加した、国連の事務所でインターンをした、などといった経験を積んだ、あるいは積もうと思っている卒業生を地道に調査する形であると考えている。今後長い目で効果を測定する必要があると考えている。